アンテベラム期における自由と自律にむけたメッセージ
−Catharine Maria Sedgwick の“The Great Excursion to the Falls of St. Anthony”−*

阿部　暁帆

はじめに

キャサリン・マリア・セジウィック（Catharine Maria Sedgwick, 1789-1867）は、国家としてアメリカが独立して間もなくの時期に生まれ、南北戦争を見届けてこの世を去った、アンテベラム期に活躍した女性である。彼女は、兄弟たちにその文学的才能を見出されて作家となったが（Willard 639）、フィクションのみならず、旅の書簡やモラルトラクトなどでも有名な作家であると紹介されている（Gale 336）。特に、遺された数多くの書簡は、セジウィックが様々な執筆活動を通じて常に何かを伝えようとしていたことを物語っている。

そして、本論で取り上げる“The Great Excursion to the Falls of St. Anthony: A Letter to Charles Butler, Esq., by One of the Excursionists”（Sept. 1854）は、チャールズ・バトラー氏宛ての旅行に関する書簡というかたちで、*Putnam's Monthly Magazine* に掲載されたものである。書簡形式の作品を発表することで、より私的なメッセージをさりげなく盛り込むことが可能となるうえに、多くの人に読んでもらいたいというセジウィックの意図も垣間見えるのである。

“The Great Excursion”には、鉄道開通を祝して開催された旅行にセジウィックが参加した様子が綴られている。旅行にやって来た人々の生き生きとした表情、船上や行く先々での温かいもてなし、それに、西部の大自然や急速に発展しつつある開拓地域に対するセジウィックの賛美など、表向きは、アメリカの国家としての着実な進歩と希望が感じられる華やかな旅についての書簡にみえる。しかしながら、当時の国内事情はどうであっただろうか。19 世紀は、国家形成に関わる社会的な基盤作りとともに、リバイバル運動（the Second Great Awakening）とそれから派生したユートピアの追求、禁酒運動、教育改革、更には女性の権利擁護運動など、民衆が主体となる活動も積極的に行われた時期であった。とりわけ、1830 年代以降は奴隷制廃止運動が盛んになり、アメリカ各地へと拡大していった。そしてこの奴隷制の是非を巡る

議論は、やがて南北双方にとって避けては通れない問題となり、1850 年の妥協（the Compromise of 1850）では、逃亡奴隷法の強化（the Fugitive Slave Law）が盛り込まれることとなった。加えて、住民主権（popular sovereignty）の原理により 1820 年のミズーリの妥協（the Missouri Compromise）が覆されるかたちとなったカンザス・ネブラスカ法（the Kansas-Nebraska Act）は、この旅行の直前である 1854 年 5 月 30 日に通過したばかりであった。

そうしたなかで執筆された“The Great Excursion”には、高まりゆく南北の緊張状態への、セジウィックの危機感や社会的メッセージが諸処に表れているようにみえる。女性改革者たちが声をあげ始めた頃とはいえ、いまだ女性が公に発言することが憚られていた社会状況を汲んで、作品ではセジウィックの名前が伏せられている。[1] しかしながら、サブタイトルに敢えて書き添えられた「旅行者の一人による」という文言は、女性であれ誰であれ、一人の人間として社会に発信したい、という彼女なりのアピールだったのかもしれない。本論では、晩年を迎えたセジウィックがこの作品に込めた、アンテベラム期に生きる人々への様々なメッセージを読み解いていきたい。

1　1854 年の the Grand Excursion

1850 年の妥協は、南部側の意図に反して地下鉄道組織を活発化させ、奴隷制廃止運動にいっそう拍車をかけることとなった。一方、実際の鉄道敷設においても、技術の進歩や領土拡大などに伴い、19 世紀半ばは建設ラッシュを迎えていた。合衆国における鉄道の総距離は、1830 年の 73 マイルから、50 年には 8,879 マイル、そして 60 年には 30,636 マイルにもなり、数字のうえでもその発展は一目瞭然であった（有賀ほか 362）。そうしたなかで、1854 年 2 月にはシカゴ・アンド・ロック・アイランド鉄道（the Chicago and Rock Island Railroad）が開通し、これによって、アメリカでは初めて、大西洋からミシシッピ川までが結ばれることとなった。そして、この開通を祝した“the Grand Excursion of 1854”には、非常に数多くの政治家や著名人、メディア関係者などが招待され、セジウィックは弟のチャールズ（Charles Sedgwick）とともに、その旅行に参加することとなるのであった（Sedgwick, *Life and Letters* 352）。[2]

図 1 のとおり、6 月 5 日の朝にシカゴを列車で出発した一行は、夕方にロック・アイランドへ到着して蒸気船に乗り換え、3 日間程度かけてミシシッピ

川上流地域を上った。そしてセント・アンソニー滝を含むセント・ポール周辺を訪れた後、10 日には再びロック・アイランドへと戻り、シカゴ行きに乗車するという帰程をとった。また、セジウィックを含む一部の旅行者たちは、ロック・アイランドから更にミシシッピ川を南下し、セント・ルイスまで旅を続けたのであった。[3]

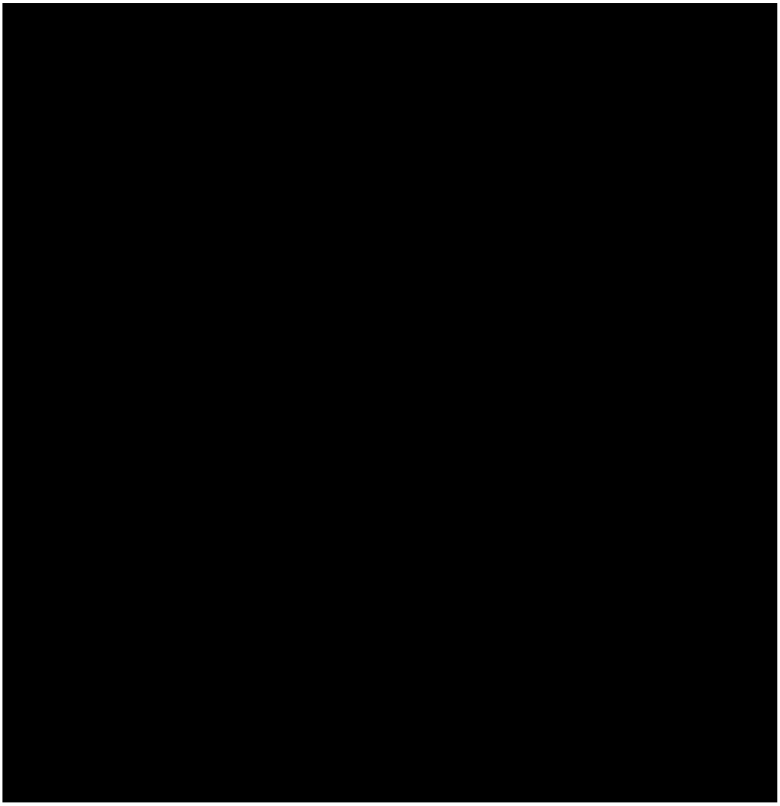

Fig.1. “Geochronology of the 1854 Grand Excursion.” *The 1854 Grand Excursion*. Curtis C. Roseman and Elizabeth M. Roseman. Web. 24 Nov. 2014 <https://www.augustana.edu/academics/geography/department/GrandExcursion2/geochronology.htm>.

乗車時間がわずか8時間弱とはいえ、鉄道開通を祝う旅行にもかかわらず、本作品では、シカゴからロック・アイランドまでの鉄道旅行の様子については、ほぼ触れられていない。セジウィックが姪キャサリン・マイノット夫人（Mrs. Katharine S. Minot、以下ケイト（Kate）と記す）に宛てた6月4日付けの手紙には、シカゴに集まった著名人たちの名前が記され、手紙の内容と同じく本作品においても、疲れた様子を見せない東部からの旅行者たちの快活な様子が描かれ、これからミシシッピ川を上っていく旅程への高揚感がみられるばかりである。[4]

目を見張る鉄道の発達は、マニフェスト・デスティニーを掲げた西漸運動の影響によるものばかりではなかった。新たな領土を巡っては、絶えず南北の政治的な駆け引きが行われていた。一方で、「交通革命によって東部の工業製品は西部へ、農産物は東部へと流れるようになり」、東西の経済的な相互依存の状態は高まっていったのである（歴史学研究会 277）。そして、そのいずれにも鉄道網の発達は一役買っていた。更には、「一八五〇年に、政府が鉄道会社に融資するために、路線の両側一定幅を無償で払い下げることを決定してからは、鉄道建設は政治家、投資家などによる利権あさりの巣となっていった」（小野 10）。

セジウィックは訪れた西部の偉大な自然美を“as Downing, with his love of nature and his study of art”、あるいは“reminding one of the fragments of Roman walls on the Rhine”、“with their resemblance to the feudal fortresses of the Old World”などと、歴史的な構造物に擬えている（323）。しかしその最後では、こうした自然は創造主の手によるもので、人間には決して作り出すことが出来ないものであると、次のように訴えている。“But no! no human hand has planted them ― no human imagination embellished them ― no human industry dressed and kept them. They have the fresh impress of the Creator’s hand― ‘His love a smile of Heaven imprest / In beauty on their ample breast’”（323）. 同様に6月11日付けのケイト宛ての手紙においても“the preserves of the Lord of earth’s manor for his children”（*Life and Letters* 355）や“yet how unlike any thing in the Old World! So fresh! so young! such abounding, vigorous vitality!”（*Life and Letters* 356）などと、ヨーロッパ大陸は異なり、神により創造された真っ新な土地である、と誇らしげに述べているのである。

また、こうした神聖な西部がどのように扱われるべきかについては、同じくケイトに宛てた 6 月 24 日付けの手紙のなかに、彼女の本音ともとれる記述がある。

> [. . .] and if they will but take with them the elements of moral as well as of physical growth, there need be no failure in this new world. The insane avarice of our people is worse than the potato-rot, and how the real worth and work of money is to be got into their heads and hearts is the problem to be solved (*Life and Letters* 357-58).

つまりセジウィックにとって、西部とは道義をわきまえた人間によって拓かれ文明化されるべき場所であり、貪欲さを持ち込むべき所ではなかった。彼女が、先に指摘したような利権問題を充分認識していたとすれば、鉄道開通を手放しで喜ぶことは難しかっただろうし、一方で、西部の広大な自然や開拓の様子に作品の大半を割いたのも頷けるのである。しかしながら鉄道網の建設が、こうしたセジウィックの絶賛した西部の大自然を、後々「文明による荒野の侵食の跡」として荒廃した風景に至らしめたことは、なんとも皮肉である（小野 14）。

2　独立宣言引用の意図

セジウィックはこの旅行の目的を“our own inalienable possessions”、すなわち“this land of promise prepared for them by the universal Father”（321）の可能性を見に来たとする一方、独立宣言で謳われた権利は未だ消化されていないと指摘している。本作品では、独立宣言は次のように書き換えられ、続いてセジウィックの思いが綴られている。

> “We hold these truths to be self-evident: ― That all men are created <u>free and equal</u>; that they are endowed by their Creator with certain inalienable rights; that among these are life, liberty, and the pursuit of happiness.” I believe that the reflecting <u>men and women</u> of our excursion party felt, as they never felt before, the great mission of their children and their neighbors who are going West (321, underlines mine).

ここには、作品に込められたセジウィックの主張が集約されているといえよう。まず、独立宣言では“men”と記されているのに対して、続くセジウィックの文章では“men and women”と言い換えられている。女性の権利獲得運動が高まってゆくなかで、作品発表の少し前にあたる 1848 年には、セネカ・フォールズで女性の権利大会での所感宣言（the Declaration of Sentiments）が行われた。この宣言は独立宣言に準えられたが、そこでも“all men and women are created equal”と明言されることで、男女平等が強く訴えられていたのである（“Report of the Woman's Rights Convention”）。独立宣言と当時のアメリカ合衆国の実情との矛盾は、奴隷制度との関連で言及されることが多いが、女性もまた平等な権利をもつことができないままでいたのだった。

当時の女性が社会的にどのような立場に置かれていたかは、例えば次のように、*The Boston Daily Atlas* に掲載された今回の旅行記事にもみることができる。“The company was large and intelligent, embracing gentlemen of almost every calling and profession from most of the northern States. The presence of the ladies, whose smiles and charms vied with the beauties of the country, gave an additional interest to the occasion”（“The Grand Railroad”）. 招待された男性たちがあらゆる天職や専門職の人々であったと記されているのに対して、女性達は旅行に華を添えた、というような書き方に留められている。[5] 当時の女性たちは法的に制限を受けていたばかりでなく、社会のあらゆる側面でも、男性と比較して不平等な状況に置かれていた。そしてセジウィックは、男性と平等な扱いを求めないまでも、女性もまた男性旅行者と同様に、西部に向かう意義を充分承知して参加しているということを、本作品を通じて人々に理解して欲しかったのではないだろうか。

それから、独立宣言では“all men are created equal”となっているが、セジウィックの引用には“free”という単語が加えられている。ここには、もちろん彼女の奴隷制廃止への思いが込められている。彼女の父セオドア・セジウィック（Theodore Sedgwick）は、上院議員やマサチューセッツ州最高裁判事まで務めた弁護士であり、裁判の末マム＝ベット（Mammy Bet or Mum-Bett）の呼び名で知られる黒人女性の奴隷エリザベス・フリーマン（Elizabeth Freeman）を、マサチューセッツ州で初めて自由黒人にした人物であった。“The Great Excursion”の発表前年である 1853 年に、雑誌に掲載されたセジウィックの“Slavery in New England”によれば、芯の強い女性で

あったマム＝ベットは、独立戦争終結後間もなくミーティング・ハウスで独立宣言を耳にして、自分も自由になれるはずではないかとセオドアに訴えたという。その後、彼女はセジウィック一家のもとで賃金を得るかたちで働いて暮らし、セジウィック一族の墓所に埋葬されるほど親密な関係を築いたのであった。“Slavery in New England”の冒頭の段落で、セジウィックは以下のように述べている。

> They [Slaves in Boston] were not numerous enough to make the condition a great evil or embarrassment, but quite enough to show its incompatibility with the demonstration of the truth, on which our declaration of Independence is based, that “all men are born equal,” and have “an inalienable right to life, liberty, and the pursuit of happiness” (417, sic).

セジウィックが、ここでも独立宣言を引用している点は興味深い。というのも、先に挙げた女性の権利擁護運動の発端は、グリムケ姉妹（Sarah Grimke and Angelina Grimke Weld）に代表されるように、奴隷制廃止運動での女性の率先した活動が非難されたことにあった。そして、その奴隷制廃止運動においては、黒人の自由獲得のために常に独立宣言が読み直されてきたのである。それゆえ、マム＝ベットの半生について描いたこの作品においても、独立宣言に触れておくことが不可欠であるとセジウィックは考えたのだろう。東部における奴隷の待遇はそれほど酷くはないにせよ、独立宣言で述べられた権利にはほど遠いものであるという彼女の主張は、翌年の“The Great Excursion”において独立宣言の抜粋に“free”を加えることで、より明瞭なものとなったのである。

同時に、この“free”には、宛名であるバトラー氏のほか、多くの東部人に対する訴えも含まれているといえるだろう。現状の生活に甘んじることなくフロンティアを目指すことで、自由かつ積極的に不可侵の権利を行使すべきである、という主張である。しかしながら、もはや純粋にマニフェスト・デスティニーを追い求めるだけの時代ではなくなっていた。女性の地位向上や奴隷制廃止に関するセジウィックの主張、そして西部への移住を積極的に薦めた彼女の真意について、更に本文を考察していくことにする。

3　一人前の女性として

グリムケ姉妹の女権論に関しては、「家庭内における女性の宗教的、道徳的役割から飛び出し、男性の活動領域に入っていったグリムケ姉妹を非難する数多くの投書が寄せられた。伝統的価値を捨てず体制内における改革を目指していたこれらの保守的な改革者にとって、グリムケの主張はあまりにも急進的すぎ、受け入れがたいものであった」という（谷中 61）。一方でセジウィックは、処女作 *A New-England Tale*（1822）では「ピューリタン的理想の女性像を継承し」、「人々のために勇敢に生きる積極的な妻であり母」でもある女性を描いたように、彼女には信仰に基づいた教養小説を創作するという目的があった（増井 123）。それゆえ彼女の作品では、女性の権利に関する主張が前面に出されることはなかった。だがそれでも、「夫に従属し、その間違いを正すことなく、受け身的に人生を送り、力なく死んでいったジェインの母を、語り手は決して美化しない」と、増井は当時の普遍的な理想の女性像に疑問を投げかけたセジウィックの姿勢を指摘している（117）。

西部に移住しフロンティアを開拓するにあたっては、男性のみならず女性の力もまた不可欠であった。移住への旅の途中で「ひとたび緊急事態［･･･］が起きれば、女性が男性に代わって馬車を御し、それまで男性がはたしてきた役割を交代しなければならなかった」ように、「女性は『家庭性』の神話とはほど遠い生活」を強いられ、時に「女性らしくエレガントであることよりも実用性」が必要とされる状況下にあった（篠田 39）。特に、開拓後から町の形成に至るまでについて、篠田は次のように説明する。

> 西部フロンティアというと、全域が大草原でその中に広大な農地が広がり、開拓農家が点在する風景を思い浮かべる。大平原の中では、各農家がかなりの距離をおいて孤立して住んでいたが、定着が進むと先ず第一に教会と学校が建てられ、生活に必要な商品を売る雑貨店や郵便局などが作られて、小さな町ができあがる。こうした農村に付属する小さな町の主役は女性で、雑貨店、郵便局、ホテル、学校、教会の実質的な活動は彼女たちによって支えられていた（48）。

つまり移住や農地開拓など、初期段階の作業は家族全員で行われるものの、開拓に伴う町づくりは、夫とともに開拓地へ移り住んだ女性や東部から派遣

された女性が主体となって行われていたのである。

セジウィックは、セント・ポールズで出会った女性教師に関して次のように述べている。

> When our steamers were lying at St. Paul's, we were visited by a young lady who was sent there as a teacher (I believed by Governor Slade) five years ago. She arrived within four miles of her destination, and was told there was no such place as St. Paul's. But the young New England school missionary was not to be turned back. She hired two Indian girls to row her to the place that had been designated to her as St. Paul's. She found there two white families, and eight white children. She began to her work, and now, in that midst of the busy hive of a population of 5,000 (it may be 6,000 now — I speak of three weeks since!), she has a large boarding-school! Such a fact urges promptness, constancy, and heroism in the cause of Western education — education in the broadest sense of the term (322).

東部から派遣された女性がほぼ未開の土地に到着し、開拓者たちを探して彼らに教育を施した結果、急速に人口が増加したという事実を、セジウィックは讃えたのである。「開発が進むにつれて、女性は新しい町や村づくりに重要な役割をはたしていた。教会や子どもたちが通う学校建設する必要性を最も強く感じていたのは女性たちであった。確かにこうした文化活動の表面に名前を連ねていたのは男性であるが、実質的に計画をねり、募金活動をおこなって実現させたのは女性たち」だったのである（篠田 54）。

当時の女性教育者としては、教師となり校長職にまで携わるとともに女性の権利確保に奔走したスーザン・アンソニー（Susan B. Anthony）が、代表的な女性として挙げられるだろう。セジウィックは彼女のように表立った活動家にはならなかったものの、1813 年に父親を亡くした後、若い女性のための私立学校を開校し、約 50 年間にわたって携わっていた。つまり、当時女性に認められた数少ない職業である教師という仕事を身につけて、女性が自立する機会をもつことの必要性を、彼女は感じていたのである。そして、とりわけ「[大衆] をいかにして知的に覚醒し、健全な共和国市民に育てあげていくか」（有賀ほか 324）、あるいは外国からの移民への教育が「多人種・

多民族国家のアメリカの国家的統一のために必要である」（篠田 78）という当時の教育改革のもとで、女性が西部で教育者となる意義を強く認識していたのではないだろうか。女性たちが実践的な活動である教育に携わることで西部が発展し、結果的に領土拡大に寄与しているということを、セジウィックはこの勇気ある女性教師の一例を挙げて示したのである。すなわち、この女性教師はセジウィックにとっての理想の女性像であったと言い換えることもできるかもしれない。そしてこの描写は、男性と全く平等な権利の獲得を追求する目的で描かれたというよりもむしろ、女性もまた一人前の人間として尽力し、アメリカ社会に貢献しているという、彼女の社会的に向けたメッセージのうちの一つだったのではないだろうか。

当時は、「家庭を中心に私的な『領域』の責任者となり、家庭外で活躍する男性の憩いの場、避難所を提供し、子どもを立派な市民に育てることが女性の重要な役割と考えられた」時代であった（篠田 21）。教養小説を執筆したセジウィックであったが、しかしながら、彼女の理想像は、形骸化されたような信仰心をもつ消極的な人間ではなく、「実践的・社会的なキリスト教信仰」（増井 118）を担う女性であった。本作品では、今回の旅行に参加した女性たちについて、以下のように描かれている。

> They were men from arduous political posts, from counting-house and banking-houses. They came from making briefs and writings sermons — from studies and studios, and above all, from the overwhelming, incessant work of railroad offices. And the women (how different from the petted and vicious beauties of an oriental court) had cast off, for the twenty holidays, the cares and tasks of their *business*, the harem of "women's rights" in homes which, as a foreign traveller well says, deserve the northern appellation of "*sacred rooms*" (320, underlines mine).

日々忙しく働く男性たちの職業が列挙された後、女性たちもまた「仕事」を「振り払って」旅行に参加したと記されている。そして女性達の「仕事」場は、「家庭における『女性の権利』の聖地（the harem of 'women's rights' in homes）」であり「聖なる空間（"*sacred rooms*"）」にあると表現されているのである。女性たちに関して記されたこの一文からは、二つの意味が汲み取れるのでは

ないだろうか。一つには、男性が「男の領域」とされた社会で働くのと同様に、女性も「女の領域」とされた家庭で働いている、すなわち家事も仕事であるということを印象づけようとしている点である。そして、女性たちはその仕事を放棄して旅行に参加した、という記述についても見過ごすことができない。イタリックで記された家事をおこなう「聖なる空間」は、セジウィックに言わせれば「『女性の権利』」とされた「北部での称号（the northern appellation）」に過ぎない。つまり、家事は男性によって理想化され、家庭は女性の自由な権利が閉じ込められてしまった空間であるからこそ、彼女たちはそれを放棄して旅行に出かけたのである。

セネカ・フォールズでの女性の権利大会の中心メンバーであったエリザベス・キャディ・スタントン（Elizabeth Cady Stanton）は、近隣の家族の台所で起きた一件、具体的には、母娘が材木置場に移動させた調理用ストーブを父と息子が元に戻してしまったという出来事を挙げて、次のように述べている。

> [. . .] I always felt that the men of that household were given to domineering. [. . .] they [the wife and daughters] were filled with grief and disappointment. The breakfast was eaten in silence, the women humbled with a sense of their helplessness, and the men gratified with a sense of their power. These men would probably all have said “home is woman’s sphere,” though they took the liberty of regulating everything in her sphere (154).

家庭はあたかも男性が踏み込めない空間であるかのように見えて、実のところ、父と息子はストーブを戻してしまう「権力（power）」を持っている。そればかりか、「『家庭は女性の領域である』（“home is woman’s sphere”）」と決定する自由をもっているのは男性であることを、スタントンは指摘しているのである。セジウィックはスタントンほど明確に主張しているわけではないものの、男性によって決められた「女性の領域」に疑念を抱いたという点では、彼女の主張と一致しているといえよう。

奴隷制廃止運動とも相俟って女性の権利擁護運動がますます盛んになっていたこの時期には、女性の地位向上に対するセジウィックの意識が、以前よ

りも高まっていたとも考えられる。必ずしも常に家庭の中に縛られるのではなく、自由に社会貢献できる権利が女性にも必要である、ということを彼女は暗に示したのではないだろうか。また、生涯独身であったセジウィックが女性教育に尽力したことからも分かるように、女性が家庭で自分の子どもを育てることのみがその役割ではなく、社会において立派な次世代市民を育成していくこともまた重要な役割である、と主張しているように思われるのである。

4　奴隷制度拡張への懸念と西部移住の勧め

The Grand Excursion に参加した人々の多くは、ロック・アイランドで汽船から列車に乗り換え、シカゴへと戻る行程で旅路を終えたが、セジウィックを含めた一部の人々は、ミシシッピ川を更に下りセント・ルイスまで旅を続けた。これらの地域には、自由州と奴隷州の歴史的変遷があり、セジウィックの出身地であるマサチューセッツ州とも関連があった。1820 年のミズーリの妥協によって、マサチューセッツ州から分離したメイン州が自由州とされたことと引き替えに、セント・ルイスのあるミズーリ州は、それまで奴隷州と自由州の境界であったメイソン・ディクソン線（Mason-Dixon Line）を外れて奴隷州となっていたのである。旅程の延長を“This episode itself deserves an epic!”（324）とセジウィックが喜んだのには、彼女がこうした歴史的経緯を注視していたことがあったからかもしれない。

セント・ルイスの様子について、セジウィックは次のような感想を述べている。

> Perhaps what most pleased us in St. Louis, and most naturally, was <u>the absence of all obtrusive signs of what we consider the only misfortune of Missouri — the only obstacle to its future pre-eminence — slavery</u>. But <u>this disease</u> has made so little progress there, that there is much reason to expect the healthful young state will throw it off. Some of its best citizens are opposed to it, and we met and heard one, a “*young* man eloquent,” who is just entering, with sure promise, political life, and who has the generous boldness to throw himself in the scale against it — God speed him! (325, underlines mine).

西部への領土拡大の結果としてミズーリ州が奴隷州となったことを、彼女は「ただ一つの不幸と考えられる全く目障りなしるし、今後の優位性に対するただ一つの障害」と表現し、強い懸念を示している。しかしながら「こうした病弊（this disease）」、つまり奴隷制度の定着はまだ進んでいないことに、彼女は安堵感を示してもいる。その地域の政治を担うことになる若者たちが適切にコミュニティを運営すれば、奴隷制度は存続し得ない、というセジウィックの信念が、ここに表れているのである。タイトルに記された宛名のバトラーは、本作品発表の翌年に彼女の姪スーザン（Susan Ridley Sedgwick Butler）と結婚したニューヨークの法律家であると考えられるが、敢えて彼を宛名とし、奴隷制に対する強い懸念をこの作品の終わりで印象づけることによって、セジウィックは彼を含む教養ある若者たちに、この問題に対する積極的な行動を促そうとしたのではないだろうか。[6]

セジウィックの奴隷制批判が、奴隷所有者に焦点を当てて論じられている点も注目に値する。彼女は、先に挙げた“Slavery in New England”の発表と同じ 1853 年に、奴隷制度に関するもう一つの作品“The Slave and Slave-Owner”を発表しており、それは次のような書き出しで始まっている。“‘I would rather be anything than a slave, —except a slave-owner!’ said a wise and good man. The slave-owner inflicts wrongs, —the slave but suffers it. He has friends and champions by thousands. Some men live only to defend and save him. Many are willing to fight for him. Some even to die for him”（24）. 奴隷所有者だけにはなりたくない、という文言に始まり、特に奴隷制廃止のために命を落とすことを厭わない人々さえ存在するという指摘は、後の 1859 年に起こったジョン・ブラウンの襲撃（John Brown’s Raid）を想起させる。なかでも興味深いのは、奴隷の悲劇よりもむしろ、奴隷制度を担う白人奴隷所有者の不幸を指摘している点である。

> To the slave are held out the rewards of fortitude, of long suffering, of meekness, of patience in tribulation. What and where are the promises to the slave-owner? Thousands among them are in a false position. They are the involuntary maintainers of wrong, and transmitters of evil. [. . .] But alas! they live under the laws of slave-owners (25).

セジウィックは、無論強制的ではありながらも徳を積む奴隷たちとは対照的に、奴隷所有者には果たして何が約束されているのか、という問いかけを行っている。と同時に、奴隷所有者たちもまた、奴隷制度存続のための制度のもとで生きているに過ぎない、と彼女は指摘する。そして、奴隷所有者たちは読み書き計算を奴隷に教えることを禁じられている、とセジウィックは更なる持論を展開するのである。こうした主張は、奴隷がプランテーションにおいて仮に自由を得られたとしても、それは奴隷所有者の裁量の範囲内でのものに過ぎない、という被支配者側からの奴隷制批判を逆手にとったレトリックだといえるだろう。奴隷制度は黒人奴隷のみならず、白人の権利をも奪っているというのである。続いて、奴隷所有者の息子や娘をもった母親はいかに不幸であるかが述べられた後、最後は以下のように結ばれている。

> The slave looks forward with ever-growing hope to the struggle that must come. He joyfully "smells the battle afar off." The slave-owner folds his arms, and shut his eyes in paralyzing despair. He hears the fearful threatening of the gathering storm. He knows it must come, ― to him fatally. It is only a question of time! Who would not "rather be a slave than a slave-owner?" (26-27).

追い詰められた奴隷所有者は絶望に脅え、奴隷制度の廃止ももはや時間の問題であろうと締めくくられている。奴隷所有者がいかに不幸かという所論や、奴隷制廃止運動の勢力はもはや拡大の一途であるという見解は、些か感情的なもののようにもみえる。特に、今さら奴隷所有者になりたい者などいるのだろうか、という冒頭を更に辛辣に言い換えた最後の一文は、西部への領土拡張と並行して奴隷制度が拡大してしまうことへの、セジウィックの強い危惧の表れのようにも思われるのである。

"The Great Excursion" では、フロンティアの開拓について "first must come our eastern people"（321）と、奴隷制廃止を唱える東部の人々が先んじて行くべきであるとし、セジウィックは次のように主張している。

> Let the young go. They should. They do go in troops and caravans, and in the vast prairies of the valley of the Mississippi may they perfect an empire

> of which their Puritan Fathers sowed the seeds on the cold coast of the Atlantic. But let them remember their fathers were proof against property. May they be against riches! (325).

旅行の前月にカンザス・ネブラスカ法が成立し、両準州においては住民投票によって奴隷制度の是非が決められることとなった状況の下で、若者に西部移住を求めることは極めて現実的な要請であっただろう。結果的には、奴隷制擁護派と廃止派の双方がこれらの地域に入り込み、流血の惨事となってしまうのであり、セジウィックはこうした事態を見越していたのかも知れない。しかしながら彼女は、建国当時の精神に従って着実に西部フロンティアを開拓する必要性を感じるあまり、この作品の末尾で若者を鼓舞せずにはいられなかったのであろう。なぜならそこには、奴隷労働による利益獲得のために西部へ奴隷州を拡大させようとする南部の思惑が、すでに蔓延っていたからである。

5　絆の象徴としての鉄道

このようにみてくると、セジウィックは信念が強く、行動的な性格の女性である、と思われるかもしれない。しかし、例えば彼女がカルヴィニズムから転向する際には、「キャサリンも兄ヘンリーに同調しユニテリアンとなったが、その決断は必ずしも強い確信によるものではない」といった慎重な姿勢が垣間見える（増井 115）。また中村は、「奴隷制廃止論者の主義主張の主唱者としてみなされたくないというセジウィックの頑なな姿勢は生涯変わることはなかった」と指摘している（57）。

加えて、平等主義という観点からいえば、“The Great Excursion”におけるセジウィックの主張には、幾つか疑問の余地が残されている。西部への移住は、ネイティヴ・アメリカンに対する虐殺や強制移住といった深刻な人権問題と表裏一体の状況にあったが、先の女性教師に関する引用箇所にみられるように、本作品では「二人のインディアンの少女」は開拓地への案内人に過ぎず、彼女たちの権利に触れられることはない。[7] また、東部や新天地である西部の奴隷制度に言及したセジウィックが、最も過酷であった南部の奴隷制度の内情をどれくらい認識していたのかについて、推し量ることも難しい。[8] 一方、西部では「教育資金の財源不足が女性の教員を雇った最大の理由」

（篠田 82）であり、そのために「泊まり歩きの制度」（篠田 95）を余儀なくされる女性教師も多く、「教師に対する身分保証はまったく顧みられ」（篠田 96）ない状況にあった。家柄に恵まれたセジウィックが、女性教育に関わる一方で、女性教師たちを取り巻くこうした西部の労働環境について、どの程度意識していたのかも気になるところである。だがこうした点も、彼女が社会運動家という立場にあったのではなく、信仰心と国家の発展に対する使命感をもった作家であったということを鑑みれば、これ以上に追求すべきことではないことかもしれない。

奴隷制廃止運動や女性の権利擁護運動の先鋒になるのではなく、“ a life of service, of self-cultivation and self-mastery, but also moral autonomy”（Foletta 57）を追求するユニテリアンとして、「時代に適合した新しい宗教の役割とモラルを主張し、さらに新しい時代の女性像を提供」（増井 126）することが、彼女の作家としての使命であった。その結果として、自身の思想や理論を社会に直接的に唱えるのではなく、物語るという形式を用いたからこそ、女性小説家セジウィックは、当時から万人に受け入れられたともいえるだろう。それに彼女の理念は、「奴隷制に反対するのは、奴隷労働に依拠する南部よりも、自由な労働にもとづく北部社会のほうが、人間の能力と可能性を伸ばすうえからはるかにすぐれた社会であるからである。［･･･］自由な労働にもとづく社会では、労働は価値であり希望である」（有賀ほか 384）という、当時の一部の政治指導者たちの理念とも合致していたと考えられるのである。

いわば「よき市民を育てるという『共和国の母』として」（伊藤 84）、ことさら彼女が望んでいたのは、“the future destiny of this land”（*Life and Letters* 357）を求めて“the Atlantic”（“The Great Excursion”325）まで西漸運動を進め、アメリカ合衆国が国家として更なる発展を遂げることであった。それゆえ、彼女は北部と南部双方の主張が互いに過激化する状況を深く憂慮していた。南北戦争の勃発が徐々に近づいていた 1861 年 2 月にチャニング夫人へ宛てた手紙には、「南部諸州“the Cotton States”」や「境界州“the Border States”」の駆け引きについて綴られた後、次のように記されている。

> But I have faith in the farther development, of the effect of our institutions. They are seed sown by the righteous— sown in love and justice to the *whole family*. We are making the first experiment of the

greatest happiness to the greatest number, and Providence will not permit it to fail short of consummation. We have in our people the elements of life and health. We are in harmony with the great natural laws" (*Life and Letters* 389).

1858 年のイリノイ州連邦上院議員選挙討論会で、利権を狙っていたスティーブン・ダグラス（Stephen Arnold Doulas）に対し、[9] 共和党候補であったリンカンは、聖書の一節を引用して行った"A House Divided"の演説において、国の分断を防ぐ必要性を説いた。これと同様に、南北が互いに利権を主張することで終には国が分断してしまうことを、セジウィックは何よりも恐れ、神に誓って"*whole family*"でなくてはならないと述べたのであった。また、1861 年 11 月のラッセル夫人宛の手紙には"I have an intense desire to live to see the conclusion of our present struggle"（*Life and Letters* 392）という一文がみられることから、セジウィックが国の行く末を見届けることを懇願していたことも分かる。

ここでもう一度、The Grand Excursion が、鉄道開通を祝した旅行であったということに立ち戻ってみたい。南北の対立が鮮明になりつつあった時期の鉄道建設の意義について、小野は次のように説明している。「政情不安定だったこともあって、鉄道のイメージに『統一』という言葉が盛んに用いられた。鉄道によって、経済的・文化的に一つに統一されるのだということが強調された。すなわち『鉄の絆』で結ばれるのだというわけである。また、第二次対英戦争に勝ち国威発揚の時期でもあったから、『進歩』『躍進』のイメージもしばしば用いられた」（17）。

"The Great Excursion"には、女性の地位向上や奴隷制度廃止への訴えかけに加え、東部の人々に対して西漸運動を推進するねらいがあった。だがそれとともに、鉄道の開通によって国内の結束がより強固なものとなるように、との意図をもって書かれた作品であったと捉えることもできるのである。つまり、本作品の執筆のきっかけとなった鉄道網の完成こそ、統一された国家としてのアメリカの象徴であり、その開通を祝した旅行について綴った作品そのものが、今後も一つの国家として存続して欲しいという、セジウィックのもう一つのメッセージだったのかもしれない。

注

＊ 本稿は、2014 年 12 月 5 日に成蹊大学で行われたワークショップ「女性旅行者と地政学的想像力」（科学研究費・基盤研究（B）「マニフェスト・デスティニーの情動的効果と 21 世紀惑星的想像力」研究代表者 下河辺美知子）において発表した原稿を大幅に加筆し、若干の修正を施したものである。下河辺氏や基調発表をされた大串尚代氏をはじめとして、当日及び当日に至るまで貴重なコメントを頂いた方々に感謝申し上げたい。

1 処女作の *A New England Tale*（1822）から *Redwood*（1824）まで、セジウィックは匿名で作品を発表している。それでも *A Woman of the Century* によれば、*Redwood* はイギリスで重版となったほか、ヨーロッパの数カ国で翻訳されていることから、彼女の作家としての才能は、当初から突出していたことが分かる（639）。

2 セジウィックは兄弟の中でも特に、兄ロバート及び弟チャールズと非常に仲が良かったという（Foletta 55, 69）。書簡が多く遺されているせいもあるだろうが、彼らの結婚によって自身に対する愛情が削がれてしまわないかという彼女の強い嫉妬心には、ブラザーコンプレックスにも近いものが感じられる。

3 The Grand Excustion から 150 周年に当たる 2004 年には、“Grand Excursion 2004”が大々的に開催され、当時の旅行の足跡を追う旅や様々な催し物が行われた。これを記念して、セジウィックの作品の一節が引用された“Merrily over the Prairie”と題された報告書には、1854 年当時の旅の詳細が記載されている。

4 ケイトは弟チャールズの娘で、セジウィックは自分の娘のように可愛がっていたようだ。詳しくは“Sedgwick Family Papers, 1717-1946”や Foletta の論文を参照されたい。

5 セジウィックが出した 6 月 11 日付けのケイト宛てへの手紙には、一緒に旅行中の男性から作品を読んでいると彼女が告げられた話があり、やはり彼女が著名な作家であったことが分かるが、こうした女性の招待客は例外的だったのかもしれない（*Life and Letters* 355）。

6 この書簡形式の作品の宛名はチャールズ・バトラーとなっているが、彼女と懇意にしていたすぐ上の兄ロバート（Robert Sedgwick）の娘スーザンの夫として、セジウィック家文書にその名は見られる（“Sedgwick

Family Papers”）。

7 Foletta は、セジウィックの遠戚がネイティヴ・アメリカンに誘拐された後にモホーク族と結婚したことに加え、セジウィックの従姉妹がチェロキー族と結婚するなど、彼女自身の親類とネイティヴ・アメリカンとの複雑な関係が、創作に影響を及ぼした可能性に触れている。（63）

8 例えば、奴隷制廃止運動とともに女性の権利擁護運動をも支援したフレデリック・ダグラス（Frederick Douglass）が、ボルティモアで比較的恵まれた環境で奴隷時代を過ごしていたことから、深南部で過酷な扱いを受けていた奴隷に対してどれほど共感を抱いていたかが、疑問視されるのと同じであろう。

9 スティーブン・ダグラスが目論見をもってカンザス・ネブラスカ法を提案したことは遍く知られたところである。だが、具体的な狙いとは、「彼がネブラスカからオレゴンに至る地域開発を重視したこと、彼自身がシカゴやその周辺の土地に投資をしていたということの他に、南部諸州に最南ルートを一時保留してもらう代わりに取り引きをしたとか、次回の大統領選で南部の支持を得ることにあったとする説も根強く残っている」（小野 12）など、様々に言及がなされている。セジウィックは北部の急進的な動きを懸念しながらも、一方で、ダグラスのような利己的な勢力に対しては、強い嫌悪感を抱いていたのではないだろうか。

引用文献

Foletta, Marshall. “ ‘The Dearest Sacrifice’: Catharine Maria Sedgwick and the Celibate Life.” *American Nineteenth Century History* 8.1(2007): 51-79. Web. 5 Mar. 2017.

Gale, Robert L. *A Cultural Encyclopedia of the 1850s in America*. Westport: Greenwood, 1993. Print.

“The Grand Railroad and Steamboat Excursion.” *Boston Daily Atlas* 22 June 1854. Web. 5 Mar. 2017.

Petersen, Penny A. and Charlene K. Roise, *“Merrily over the Prairie”: The Grand Excursion Ventures to Saint Anthony Falls*. Minneapolis, Apr. 2004. Web. 24 Nov. 2014 <file:///C:/Users/aa/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/VCAYMFTT/Grand%20Excursion%20Final%20

Report.pdf>.

"Report of the Woman's Rights Convention." *Rights for Women: The Suffrage Movement and Its Leaders*. 2007. National Women's History Museum. Web. 5 Mar. 2017 <https://www.nwhm.org/online-exhibits/rightsforwomen/DeclarationofSentiments.html>.

Sedgwick, Catharine Maria. "The Great Excursion to the Falls of St. Anthony: A Letter to Charles Butler, Esq., by One of the Excursionists." *Putnam's Monthly Magazine* 4 (1854): 320-25. Web. 1 Nov. 2014.

—. *Life and Letters of Catharine M. Sedgwick*. Ed. Mary E. Dewey. New York: Harper & Bros, 1871. Web. 5 Mar. 2017.

—. "The Slave and Slave-Owner" *Autographs for Freedom*. Ed. Julia Griffiths. Boston: J.P. Jewett and Company, 1853. 24-27. Web. 5 Mar. 2017.

—. "Slavery in New England." *Bentley's Miscellany* 34 (1853): 417-24. Web. 1 Nov. 2014.

Sedgwick Family. "Sedgwick Family Papers, 1717-1946." *Collection Guides*. 2006. Massachusetts Historical Society. Web. 24 Nov. 2014 <http://www.masshist.org/collection-guides/view/fa0248>.

Stanton, Elizabeth Cady. *Eighty Years and More (1815-1897): Reminiscences of Elizabeth Cady Stanton*. New York: Europian Publishing Company, 1898. Web. 5 Mar. 2017.

Willard, Frances E. and Mary A. Livermore,eds. *A Woman of the Century: Fourteen Hundred-Seventy Biographical Sketches Accompanied by Portraits of Leading American Women in All Walks of Life*. Tokyo: Athena, 2008. Print.

有賀貞、大下尚一、志邨晃佑、平野孝編『世界歴史大系 アメリカ史 1—17 世紀～ 1877 年—』山川出版社、1994 年 .

伊藤淑子「女たちの独立宣言—セネカ・フォールズの意見書など」亀井俊介・鈴木健次監修、荒このみ編『史料で読む アメリカ文化史 2 独立から南北戦争まで 1770 年代—1850 年代』東京大学出版会、2005 年：82-94.

小野清之『アメリカ鉄道物語—アメリカ文学再読の旅』研究社出版、1999 年 .

篠田靖子『アメリカ西部の女性史』明石書店、1999 年 .

中村正廣「セジウィックとマーティノーと奴隷制廃止運動—*Redwood* と *The*

Linwoods を中心に」『外国語研究』49 号（2016 年）：37-65.
増井志津代「キャサリン･マリア･セジウィックとピューリタニズム―『ニューイングランド物語』を中心に」上智大学アメリカ・カナダ研究所編『キリスト教のアメリカ的展開―継承と変容』上智大学出版、2011 年：105-29.
谷中寿子「グリムケ姉妹―アメリカ奴隷制廃止運動から生まれた女権理論」『東洋女子短期大学紀要』15 号（1983 年）：59-71.
歴史学研究会編『南北アメリカの 500 年 2 近代化の分かれ道』青木書店、1993 年 .